

公開講演

文芸としての日記

——王朝時代の日記文学を中心にして——

The diary as literature: Heian nikki bungaku

William H. McCullough

The essay first attempts to clear away some of the common misconceptions about the nature of diaries (that they are nonfictional records of actual events, that they are composed serially at frequent intervals immediately after the events recorded, that their intended audience is the diarist himself, and that the narrator and the author of the diary are identical) and then defines the diary as a first-person narrative of a discontinuous series of more or less self-contained responses to the narrator's present situation and present experiences. Several qualifications to, and amplifications of, that definition are made concerning the serial structure of diaries; the strong assertion of the self achieved through the diary's characteristic temporal, spatial and personal perspectives; the distinction between public and private diaries; the typical rhetorical tone of diaries; the presence of themes in diaries; etc. The essay then turns to the Heian diary, first pointing out its characteristic mode of self-

* William H. McCullough カリフォルニア大学バークレ教授、1982年7月1日から12月31日まで国文学研究資料館客員教授

assertion and view of the self, and then discussing two representative examples of “diary literature,” *Tosa nikki* and *Kagerō nikki*. It is concluded that *Tosa nikki* fails as diary literature because it unsuccessfully mixes two literary forms, the diary and the poetry collection; because of the multiplicity of its themes; and because of the ambiguity and weakness of the diarist’s voice. It is argued that *Kagerō nikki* succeeds for a variety of reasons, including the power and universality of its principal theme, the authenticity of its voice, and the narrative density made possible by a unifying theme.

この試論では平安時代中期の日記、殊に当時の日記文学とその文学的特性を論じるつもりであるが、題は日記であるから、本論へはいる前に、先づ日記形態自体について少し考察することが有益ではないかと思う。

日記と呼ばれる著作を見ると、その種類が非常に多くて、又それぞれの種類の相違は、意味のある、実用にたえる纏まった定義ができないほど大きいようである。たとえば、藤原実資のまじめな、何冊もの公的な記録と、和泉式部の二つの情事の叙情詩的な短い叙述と、アナイス・ニン (Anais Nin) の多弁な、内省的な文章とは、納得のできるように、一つの文の形態に分類されるかどうか疑問であるかも知れない。こういう、一見非常に違った著作が、実は重要な共通の特性を幾つか持っているとする、その特性は具体的にどんなものであろうか。

私の知っている限り、こういう問題は従来ほとんど無視されている。ロベルト・ファザーギル氏 (Robert Fothergill) は、今のところイギリスの日記形態の唯一の有力な批評家であろうが、ファザーギル氏によると、日記というものは、誰かが「日記を作ろう」と思って作ったものである。ということ

(註1)

であるが、それは勿論半分冗談であり問題を避けた定義である。実はファザーギル氏は、日記が何かという問題についてかなりはっきりした見解を抱いていて、私の今からの論はそれに負うところが色々あるが、ファザーギル氏の視点は、ピープス（Pepys）を代表作と認めたイギリスの日記のそれなので、彼の日記論は必ずしもピープスも実資も和泉式部も包含できる一般的な日記の観念として適用しないようである。

日記形態の共通特性に関する、一般に承認された定説がないから、その問題に対して自分なりの考えかたを簡単に述べようと思う。まず、論議の便の為に日記に対するしばしばある思い違いを四つ五つ指摘したい。

思い違いの一つは、日記が現実の事件や経験などの記録で、仮作的でなく、歴史的であるという誤解である。実は、部分的に、仮作の日記もあり全体的に仮作の日記もあり、完全に仮作のない日記は僅かしかないと思われる。

もう一つの思い違いは、日記が、その叙述の形態のように、実際に逐次的に作られる——即ち日記作者が折々割に短い文を次々作り続けるというのである。実は、一度に作った日記も、一度に改訂した日記もあり、実際の著述が文の時間的な仕切りに完全に一致した日記は少ないと言えよう。従って、日記は必ずしも事件・経験・反応の即時記録ではなくて、著述が記録された事が起った時から時間的に遠く離れた場合もよくある。

もう一つの誤解は、個人の日記が本質的に私的なもので、日記作者以外の読者を予想しないで作られるというのである。実は最初から出版を予想して作られた日記がよくあり、誰か特定の読者あるいは一般の読者達の為に作られた日記が普通であろう。

つぎに、日記の語り手（ナレーター）——即ち日記の中の「私」という人を作者とってしまう誤解もある。それは日記作者が誰も自分のことを完全に有りのままで描けないという自明のことによるだけではなくて、日記作者が故意に自我の仮作形態を作ろうとすることも あるからである。

後程この論点の二、三にもう少し詳しく触れるつもりであるが、今それら

を誤解と認めれば日記はその著述の歴史的な事情によって決められたものではなく、文学的な構造物であって、日記形態の特性を主に日記叙述の分析で見出すべきであるという結論が出ると思う。考察の中心は日記の外のこと——著述の事情、作者の伝記、作者の意図、予想した読者達など——ではなくて、実際に日記の中に存在するものである。

日記形態の定義をもっと一般的なことばで言おうとすると、日記が皆第一人稱、あるいはそれに準じた言い方で、断続的な逐次体として作られて、その内容は日記の語り手の、当時の事情や経験と語り手のその事情や経験に対するほぼ独立な反応であるというぐらいのことであろう。しかし、こういう定義には但し書きや説明を色々加えなければならない。

日記の叙述は、日付けや年月などのある、別々の記事を連ねたものなので、逐次増補によって成長して、語り手の命の終りまで続けられる観がある。主要な構造要素は、時間と語り手の生活の事件やその事に対する語り手の反応であって、普通、プロットはない。従って、日記は、ほぼ実際の時間の経過、過去から未来への経過に等しいように、主観的な経験を具体化する為の文学形態といえよう。

日記の叙述の視点は、引用された他人の話を除けば、完全に語り手のそれである。語り手が自分の声で語って、日記は第一人稱の叙述になっている。しかも、空間の視点は間近の前景、即ち語り手自身の経験であって、時間の視点、即ち各記事の中心的な当時は現在である。こういう人物・空間・時間の三つの視点の結合は強い自我の主張を醸し出すものである。

日記の中に見える地名、人物、事件などによって、語り手が即ち作者であるという印象が助長されている。しかし、日記の語り手は、普通、相当な程度まで芸術的な、あるいは仮作の作り物である。語り手と日記作者との関係は小説の作家と小説中の人物とのそれと、ほとんど変わらない場合もある。又、前に述べたように、完全に仮作の日記もある。しかし、日記は必ずしも文字通りの真実のものではないかも知れないが、実際の生活に忠実という意味で、

それらはいつも写実の作品であろう。

日記は逐次体で、内容がしばしば雑多であるから、叙述の途中でその形態が変りやすく、同じ日記でも、回顧録、逸話、韻文、物語、随筆、消息文、小品文などが潜り込むことがある。しかし、こういう部分を除けば、日記のレトリカル・トーン（修辭的な調子）は、大抵真摯、まじめ、本気であって、皮肉な、諷刺的な書き方は滅多にない。人は、普通自分のことを大事に思うから、そういうトーンが当たり前であろう。

日記は皆何か一つ又は幾つかのテーマを持っている。テーマがあるというのは、どんなに大きな日記でも、語り手のことを全部記録することはないという意味である。いつも何かテーマの原理によって、語り手が事件や経験事を選び出すのである。

日記の内容を見ると、二つの大まかな種類が認められる。一つは公的なもので、もう一つは私的なものである。公的な材料を中心にした日記は主に語り手の職業とそれに関係のあることを記録するもので、こういう日記はしばしば何か公的な役に立つと思われて作られたのである。語り手が、藤原実資のように、わりに高級な役人や政治家なら、公的な日記が歴史記録に近づいて、歴史記録のように、個人の生活が歴史の事件の背景となっている。

私的な材料を中心にした日記は、主に語り手の生活自体を大事にして、その価値を他所に求めないわけである。私的な日記では、歴史の視点が逆さまとなって、個人の私事が前景であって、その裏に歴史の事件がほのかに過ぎて行くようである。^(注2)

以上述べた日記の定義を参考にして、今、論を平安時代中期の日記、殊に当時の日記文学に切り換えようと思う。先づ、イギリスの日記との比較からいえる平安時代の日記に共通な性質を一、二指摘して、それから、『土佐日記』と『かげろふ日記』を中心にして、日記文学がなぜ文学かという問題をちょっと考察したいと思う。

日記の特性の一つは、自我の主張であるが、平安時代の日記も、その点で、

例外ではない。日記の材料が語り手の生活であり、叙述が語り手の声で述べられているから、自我主張は当たり前であって避けられないことであろう。しかし、同じ自我主張であっても、場合によって、その主張の仕方が違うこともある。平安時代の日記——文学である日記も文学でない日記も——当時の日記の場合に、その特性的な自我主張の仕方はピープス、イヴェレン (Evelyn)、バーベリオン (Barbellion)、アーナイス・ニンなどのようなイギリスの日記のそれと著しく違っている。イギリスの日記では、自我に対する関心はよく語り手の生活の全面に亘っているから、作者が上手で、長い間日記の叙述を続ければ、結果はファザーギル氏のいう、Serial autobiography (逐次体自叙伝) ——その間の、ほとんど完全な自画像——である。たとえば、ピープスのような日記の語り手は自分に関することは全部、面白く記録に値すると思うようである。自分の朝廷・海軍局・議会の活動、自分のかかわった、見聞した大小の事件、自分の経済、自分の事件や人物に対する反応、色んなことに対する自分の思考や考え、自分の家庭的な生活、自分の容貌・服・健康、自分の社交など、自分のことなら、何でもかんでも記録したわけである。性的な生活や、恥になることでも記述して、何も省略しなかったという印象を、読者が受けるわけである。

平安時代の日記では、自我主張は非常に選択的なものである。その主張の中心は、自我の全部ではなくて、ある一つか少数の、特定の役を勤める自我である。周知のことであるが、その時代に、漢文の日記も和文の日記もあって、漢文の日記は作者が皆、京の公家で、本文が長いものもあるが、和文の日記は、語り手のペルソナが皆、貴族の女性で、本文が短いのである。漢文日記の自我は、いつでもといってもいい程、廷臣や家長という役で見えていて、日記の記事の大部分は朝廷の仕事、朝廷と家族との儀式、一門の業務などだけしか記録しないのである。たとえば、中宮が藤原道長の邸宅を訪問した時に、道長が日記でその日の儀式などを詳しく、現代版で四、五ページぐらい記録しているが、個人の私的なこと——たとえば、道長が朝食で何を食

べたか、その晩、誰と寝床を共にしたか——噂話、小事件など、何一つ記されていない。

和文の日記でも同じように焦点が、一つか少数の役に置かれているが、そこでは、語り手の主な役が、普通、潔癖な、感覚の鋭い貴族女性、特に、辛い事情で苦しんだ貴族の妻か愛人のそれである。たとえば、『かげろふ日記』の語り手が、夫の兼家との辛い関係のこととその関係に対する自分の反応とをかなり詳しく記述したが、外には自分のことはほとんど記録していない。

『かげろふ日記』は全く私的なものであるが、その私的な材料の範囲が甚だ狭く、個人生活の一つの役だけに限られている。たとえば、語り手は自分のお寺の参詣のことを述べると、大抵、その時の経験事や見聞したことを無視して、参詣中の自分の感情や考え方に叙述を集中して、その集中は極端で、地理的な場面の変ったことにも気が付かない読者もあると思われるぐらいである。

平安時代の日記の、もう一つの特徴は、日記に見える自我の役が、いつも尊敬すべきか、嘆賞すべきか、共感すべきか、そのようなものである。そういう日記では、ボスウェル (Boswell) のような語り手が女郎を買って、妻に梅毒を伝えるというような記事が見えることは全くなく、又考えられないことであろう。(それは、梅毒が16世紀まで日本に伝わらなかったようであるが、単にそのためによるのではない。)平安時代の日記は、漢文のものも和文のものも、例外なしに、高潔な、慎重な、ことばの慎み深い作品である。毎日の生活の出来事、特に下品な出来事がそういう日記に、滅多に見えないわけである。時々、捨てた屍のことや、人間の足などを銜えた犬のことが漢文日記に出るのであるが、それは無作法な好奇心からではなくて、そういうことが齋で、語り手の公家や家長の役に影響を及ぼすからである。ピープスやボスウェルの日記などには、性的な生活の体の自然の作用に関する記事が多くて、そういう日記を読んだ後で、すぐ平安時代の日記を見ると、その日記の純潔さが非常に印象的である。イギリスの日記は味のしつこい、時に不快

なシチューなら、平安時代の日記は精練された、時に味の薄い汁物と言えるかも知れない。

この平安時代の日記の純潔さは、その日記に見える自我という概念の一面であると思う。イギリスの日記は、多く、修養して、何か道徳的や倫理的な模範に到達しようとする人の行動や思考などの記録であるから、日記の中の自我は成長中の、未完成のもののようなものである。語り手の失敗や卑しい作業は、その成長過程の一部に過ぎないのである。平安時代の日記は達成された役——語り手がある特定の、もう勝ち取った役をどう勤めたかということ——の記録であるから、日記の自我は普通、成長していく未完成なものではなくて、出来上った存在という資格で記述されている。実は、語り手のことが、よく他人の模範とすべき物として、述べられているようである。とにかく、語り手の道徳的や倫理的な自我改善の苦闘が平安時代の日記には見えな
いか、見えても珍しいことであろう。たとえば、『かげろふ日記』の語り手は、兼家に対する自分の行動や態度と、その結婚の失敗に対する自分の責任とに疑いをはさむことはないであろう。『御堂関白記』の語り手も、同じように、自己批判しないわけである。『かげろふ日記』と『御堂関白記』との語り手は大いに自分の行動や反応に満足しているように思われる。故に、平安時代の日記は、自己批判や自己分析のものではなくて、理想的な横顔のようなものである。

漢文日記と和文日記は、両方とも今述べた性質を共にしているが、文学であるかどうかの点になると、ことが随分違っている。文学の本質についての見解は色々あるが、ジャン・エリス (John Elis) によると、文学は、ことが唯知識を伝える為だけに使われた元の場面から独立して、その芸術性の為にも、一般の読者に読まれている^(註3)作品である。この説を採用すれば漢文日記——殊に平安時代初期と中期の漢文日記——は明らかに文学ではないが、和文日記は『紫式部日記』を除けば、皆、普通に認められたように、文学であることは疑いないであろう。この和文日記を文学にさせる共通な特質、即ち

エリス氏のことばでいうと、その文学性の原因を幾つか論じて、それをこの試論のむすびにしたいと思う。『土佐日記』が日本文学の最古の標本であり、『かげろふ日記』がジャンルの傑作であるから、この二つを中心にしながら論を進めようと思う。

紫式部が書いたように、『竹取物語』が物語の親なら、日記文学の場合には、確かに紀貫之の『土佐日記』がその先祖の榮譽を担うであろう。『土佐日記』は周知の如く、貫之が土佐国の守の五、六年の任期を勤め上げて、935年の晩冬から翌早春に京へ帰る55日の旅の記録である。この日記は、作者が日本文学の歴史で一番よく知られた歌人の一人であり、日記自体が日記文学ジャンルの発端なので、有名な作品であるが、文学としても名を幾らか得る資格、即ちその文学性の原因がジャンルの全体に共通であるから、注目に値するものと思われる。

貫之は歌人であって、その短い、現代版で20ページの日記に60首ぐらいの和歌が載っていて、その数と多様性は日記が初心者への和歌入門書かも知れないという見解もあるぐらいである。従って、読者の日記に対する反応が大いにその和歌に対する反応に支配されているが、その和歌に対する反応は、一つに、和歌の質に頼り、もう一つに、和歌と和歌の誘因となった事情との適合、即ち和歌とその前後の散文との適合に頼っていると思う。和歌もよくできていて、場面の描写の観賞が和歌で高められ、和歌の効果が場面の描写で増大されるように、和歌と前後の散文との結合が緊密で、和歌と散文が相互に強め合うと、日記の文学的な成功はもっとも大きいと思われる。例を挙げると、日記の最後の記事では、こういう和歌と散文との、割に上手な結合が見られる。貫之の一行はもう京の家に着いているが、留守の間に、家や庭が酷く荒れているから、帰宅の喜びが潰されてしまって、貫之の妻と思われた人は、池のような所の近くに生えだした小松を見て、京の家で生まれて土佐でなくなった小さな娘のことを思い出すわけである。そして、日記の文はこうである。

「家に至りて門^{かど}に入るに、月明^{あか}ければ、いとよくありさま見ゆ。聞しより
もまして、いふかひなくぞこぼれ破^{やぶ}れたる。家に預けたりつる人の心も、
荒れたるなりけり。中垣こそあれ、一つ家のやうなれば、望みて預かれる
なり。さるは、便りごとに物も絶えず得させたり。今夜『かかること』と、
声高^{こわだか}にもものいはず。いとはつらく見ゆれど、志はせむとす。さて、池
めいてくぼまり、水つける所あり。ほとりに松もありき。五年六年のう
ちに、千年^{ちとせ}や過にけむ、かたへはなくなりけり。今生ひたるぞまじれる。
大方^{おほかた}のみな荒れにたれば、『あはれ』とぞ、人々いふ。思い出でぬことな
く、思ひ恋しきがうちに、この家にて生まれし女子^{をむなご}の、もろともに帰らね
ば、いかがは悲しき。船人^{ふねびと}も、みな子たかりてののしる。かかるうちに、
なほ悲しきに堪^たへずして、ひそかに心知れる人といへりける歌、
生まれしも帰らぬものをわが宿に小松のあるを見るが悲しき。
とぞいへる。なほ飽かずやあらむ、またかくなむ。

見し人の松のちとせに見ましかば遠く悲しき別れせましや。^(註4)」

しかし、『土佐日記』では、いつも和歌と散文とが、相互に強め合うとは限
らない。散文が詞書ぐらいであり、和歌を持ち出す為の従属的な要素でしか
ないケースもかなり多いようである。たとえば、次は1月13日の記事の前半
分である。

「十三日の暁^{あかつき}に、いささかに雨降る。しばしありて止みぬ。女これかれ、
沐浴^{ゆあみ}などせむとて、あたりのよろしき所^おに下りてゆく。海を見やれば、
雲もみな波とぞ見ゆる海人^{あま}もがなはずれか海と問ひて知るべく
となむ歌よめる。^(註5)」

こういう場合に、日記の文学的な効果は完全に和歌の質に頼っていて、日
記性がその評価にほとんど絡んでいないから、『土佐日記』はある程度、日記
文学として失敗した作品ではないかと思う。貫之はあまりにも日記の特質や
能力を無視して、違った文学形態を運び込んだから、日記としての力が弱く
なったと言えよう。

『土佐日記』では、和歌の役は、『かげろふ日記』のような日記よりも強く、目立ったものであるが、日記文学全般では、和歌とその前後の散文が重要な要素であって、又、『和泉式部日記』のようなものでは、どちらかというと、和歌の役割が、『土佐日記』のそれよりも大きいと思う。実は、歌物語を物語と区別するように、和歌を中心にした日記を、同じような理由で、他の日記文学と区別して、歌日記といった方がいいのではないかと思う。こういう歌日記の批評の焦点は、その和歌に置かれなければならない、その日記としての特色はあまり問題にならないから、日記文学のジャンルから外すという議論も成り立つかも知れない。特に『和泉式部日記』のような作品は、日記よりも、和歌の家集と共通な性質が多いようであるから、そういう作品を日記として読めば、分析も評価も誤るであろう。

和歌の数とその使い方は、『土佐日記』を、日記文学として幾らか弱めると思うが、その弱さが、テーマの多様性と自我の曖昧さで助長されているようである。こういう弱点も、『かげろふ日記』の文学的な成功を理解する手掛になるから、ちょっと触れたいのである。

貫之は『土佐日記』の内容を一つの範囲の狭いトピック——即ち土佐から京までの旅——に絞った点で後の日記文学の基礎を作ったが、そのトピックの材料を統一できるような強力なテーマを見出さなかったから、その非常に短い作品では、凝縮ができなくて、芸術的な重さはないのである。作者が日記で、テーマを幾つか展開させたが、読者の心を強く打つぐらい、徹底的に、はっきりと展開したものはないであろう。批評家は日記で色んなテーマを見出して、そのテーマが批評家によって違うのは、作品にテーマの焦点がないからであろう。ある批評家によると、日記の主なテーマは、生活における芸術の中心性と人間生命の悲劇という二つであるが、それらは、確かに、あんなに小さな作品にとって大き過ぎるテーマであろう。それに、土佐でなくなった娘に対する貫之とその妻との追憶や悲しみ、人間の貧欲や背信、歌人としての貫之の優秀性や名声、大自然の変らないことと対照的な人間のは

かなさ、というようなサブ・テーマや小さなテーマがその二つの大きなテーマに伴っていると言えよう。あの短い日記に、テーマがこんなに多いので、叙述に浅い感じがあって、文学的な効果がちょっと薄くなるのである。

しかし、文学的な欠点を言うなら、もっと重要なのは、語り手の自我が日記で強く主張されていないことである。日記の序文を見ると、語り手は女性のようなのであるが、その女性が誰か、貫之一行と一緒に土佐から京へ行ったか、というようなことも、読者に分らなくて、序文の女性は後の文にはっきり見えないから、叙述の視点に曖昧なところが多い。誰が日記の叙述をしているかよく分らないのである。読者の感情や思考がこの日記で強く刺激されないとすれば、それは多分、日記に見えることを全部、自分の目で見ながら、自分の心で感じながら、自分の一つの意識で日記の叙述を統一して、自我像を描く、はっきり見分けられる一人の語り手がないからであろう。この語り手の曖昧さと強力に展開されたテーマの欠如とは、日記の感情的、芸術的な迫力を弱めるようであり、そのせいか、この日記が、かなり抽象的な歌人に関する、幾らか浅薄な、あまり工夫されない作品であるという気がする読者が少なくないと思う。

『かげろふ日記』は約20年間に亘る、語り手と兼家との夫妻関係の記録であり、その長い間に、求められた美人や応じた嫁のはかない喜びから、裏切られた妻の深い怒り・悲しみ・懸念を経て、割に落ち着いて静かな気分になるまでの、語り手の心情展開をかなり詳しく記述するものである。

作品は悲しみと憎しみの日記と呼ばれたこともあるが、それぐらいのものだけなら、今でもまだ読者の感情や思考を刺激するはずはなかろうが、実は、きわめて印象深いものである。『かげろふ日記』は、このように強い感動を与える著述、即ち文学として成功した著述であるが、その強さや成功の原因を理解できれば、日記文学の全般に対する批評の役に立つ観点の確立に与って力があるのではないかと思う。

先づ、この日記の文学的な成功の主な原因の一つが、そのテーマの普遍性

や重要性にあるのはいうまでもないことであろう。そのテーマは、愛情と依存との要求と対照しての背信と隔離や疎外の実際状態——もっと簡単にいうと、愛情の失敗、愛情が何であり得るか、何であり得ないか——というぐらいいなことではないかと思う。日記に見える悲しみや憎しみが愛情の要求と頼りなさという普遍の人間悲劇から生じて、愛情の限界を認める——即ち人間の本質的な隔離を認める——ことによって、語り手がついにその憎しみや悲しみを超越して来るわけである。このテーマは単純であると同時に、深遠、普遍であるから、読者の心情や思考を刺激する強い道具となるものである。

『かげろふ日記』の文学的成功即ちその文学性のもう一つの原因は、日記の与える真正性——まことで正しいこと、偽りのないこと——の印象であろう。こういう真正性は、日記全般の生得の性質のようであるが、『土佐日記』は日記でもその性質がないか、あっても非常に薄い場合もあることを示している。『土佐日記』では、はっきり見分けられる語り手がなくて、又、述べられたことに対する態度がしばしば客観的であり、超然とした、時に皮肉っぽく、あるいはユーモラスであるから、そこで記述された事件や感情が実際、まことのものであるという印象が弱くなる。従って、読者自身も、よく日記の内容に対してかなり無関心の態度を取ると思う。

しかし、『かげろふ日記』には、非常に悲しい女がついに、不幸のどん底で、愛情と希望を投げ捨てて、ある程度、安心や落ち着きを獲得するというような人間の真正の声が聞えるようであるが、その中心的な原因は、はっきり見分けられる一人の語り手の声が日記を始めから終りまで完全に支配していることと、記述されたことに対する語り手の態度が首尾一貫して真摯、まじめなこと、その二つのことではないかと思う。読者は、語り手が誰か、日記の一行目から最後のことばまで、はっきり分っていて、語り手はいつも自分の声で述べて行って、日記に記されていることは全部、語り手の意識を通した語り手自身の経験の表現である。『土佐日記』に見えたような曖昧な叙述視点がなくて、読者は、作者と信じた語り手と直接に話し合う気がするであ

ろう。同時に、語り手の、述べられたことに対する態度は、普通、客観的あるいは皮肉っぽい態度ではなくて、情熱的であり主観的であって、記録した事件などを語り手が一生涯大事なことと見做しているのは、あまりにも明白なことである。語り手の声が甚だ強く情熱的で、日記に記されたことは全部、語り手の目と心でしか見られないから、その自己没頭や排他性からの反発で、読者は時々兼家の弁解も聞きたくなるかも知れないが、作者が日記に小説の視点で運び込んで兼家の見方や考え方を記したならば、それは日記の真正性を弱めたであろう。自我の知識は唯一な、真正の知識であるから、専らその知識を主張して、語り手が読者に日記の真正性を保証するわけである。

真正性は日記形態に本来的なものの一つであり、本格的な日記には常にあるであろうが、『かげろふ日記』では、もうちょっと独自の、日記の文学性に大きな影響を及ぼす性質もある。それはテーマの完全な統一によって達成された凝縮性である。『土佐日記』は、文が非常に短くて、テーマが多様で、読者に深く反応させるほど展開された主題はないから、日記が軽い印象を与えらると思う。しかし、『かげろふ日記』は、テーマが一つで、語り手が一途にその一つのテーマを日記の始めから終りまで展開させるから、分量が割に短くても、内容は密度が高く、読者に印象深いのである。作者は語り手を通して読者に何を語りたいのか、はっきり分っていて、そのテーマに関係のないことを切り捨てて、叙述の強さを弱めることを避けた。

日記の前半では、語り手が兼家との結婚の失敗、自分の悲しみ、絶望、不安などを述べようとして、それに対して役に立たないことにはほとんど触れないのである。その夫婦生活でも、楽しい、落ち着いた折もあったはずで、即時的に生活の全部を記録する日記であったならばその楽しい、落ち着いた折の記事が、悲しみ、絶望、不安の折のそれと同じぐらい、大きく記されたであろうが、作者はそれを厳しく切り捨てて省略し、読者の注目をその一つのテーマに集めた。

たとえば、兼家との関係が始まった翌年、子供が生まれたが、語り手はそ

の子供の誕生を非常に簡単に、一、二のセンテンスで記述した後で、すぐ他の女との兼家の不貞の関係を発見したことを詳しく、子供の誕生の記事の長さの何倍も、述べるのである。誕生の記事はこうである。

「なほもあらぬこと〔懷妊のこと〕ありて、春、夏、なやみ暮らして、八月^{づき}つごもりに、とかうものしつ〔出産した〕。そのほどの心ばへはしも、ねんごろなるやうなりけり。^(註6)」

子供の誕生は楽しいことであつたはずであろう。子供ができて、語り手の、兼家に対する地位はずっとしっかりして来て、又、子供が男であつたから、語り手自身の老後の将来が幾らか頼もしくなったであろう。それに、兼家が特に語り手に優しくした。こういう楽しい折であるはずにもかかわらず、その楽しさのしるしは何一つも日記に記されていない。兼家の優しさ、出産の賑やかな場面、誕生を祝う儀式、兼家の赤ん坊との初対面などは皆、切り捨てられて、その冷淡な、短い文は、次に来る、兼家の不貞の関係を詳しく情熱的に記述する文の背景か序文に過ぎないものになるのである。誕生のことを記述した後で、すぐ語り手は中心の関心事、兼家の頼りなさが引き起した悲しみに戻って、こう述べる。

「さて、九月^{ながつき}ばかりになりて、出でにたるほどに、箱のあるを手まさぐりに開けて見れば、人のもとに遣らむとしける文^{ふみ}あり。あさましさに、見てけりとだに知られぬと思ひて、書きつく。

うたがはしほかに渡せるふみ見ればここやとだえにならむとすらむ。など思ふほどに、むべなう、〔案のじょう^{かみなづき}〕十月つごもりかたに、三夜^{みよ}しきりて見えぬ時あり。兼家つれなうて〔何くわぬ顔をして〕『しばしこころみるほどに』など、気色^{けしき}あり。これより、夕さりつかた、『内裏^{うち}にのがるまじかりけり』とて出づるに心えで、人をつけて見すれば、『町^{まち}の小路^{こうぢ}なるそこそこになむ、とまりたまひぬる』とて来たり。さればよと、いみじう心憂しと、思へども、いはむやうも知らであるほどに、二、三日ばかりありて、あかつきがたに門^{かど}をたたく時あり。さなめりと思ふに、憂くて、開けさせ

ねば、例の家とおぼしきところにもものしたり。つとめて、なほもあらじと思ひて、

なげきつつひとり寝る夜のあくるまはいかに久しきものとかは知る。
と、例よりはひきつくろひて書いて、移ろひたる菊にさしたり。返りごと、あくるまでもこころみんとしつれど、とみなる召使めしつかひの来あひたりつればなむ。いとことわりなりつるは。

げにやげに冬の夜ならぬ真木まきの戸もおそくあくるはわびしかりけり。
さても、いとあやしかりつるほどに、ことなしびたる。しばしは、忍びたるさまに、内裏になど言ひつつぞあるべきを、いとどしう心づきなく思ふことぞ、かぎりたきや。^(註7)」

このように、失敗・悲しみ・絶望・不安ばかりに打ち込んで、他を顧みないことは、殊に日記の前半に目立って、語り手が鳴滝へ逃げる時に、その書き方が頂点に達すると言えよう。語り手は、調和・安心・幸福の折を完全に無視するわけではないが、そういう記事の大部分は、語り手の普通の悲しみなどを浮き彫りにするのに使われているようである。

このように、いつも自分の悲しみ・不安などを強調して自己を憐憫した語り手を嫌う読者もある。こういう読者にいわせると、語り手の苦しんだことの責任は多く語り手自身にあって、兼家に対して無理な要求をせず、いつも不幸をいわず、もっとおとなしかったら、彼との関係がもっと旨く行ったであらうというのである。語り手は他人のことには理解も同情もできないぐらい、自己本位の人物であったという見解もある。なるほど、兼家が語り手のところに通い出した時にも、もう妻もあって、よく知られた好色家であったから、彼の他の女との関係をそんなに驚いて恨んだ語り手の態度はちょっと納得できないかも知れない。又、兼家の妻に宛てて同情を求めた語り手の手紙や兼家の情婦の子供の死に対する語り手の満足風な反応など、常識からすると、ちょっと分りにくいことであろう。こういうことを見ると、語り手はたしかにあまり感心できない人物のようであるかも知れない。

しかし、そういった、語り手に対する感想によって、日記の読解を歪めさせてはいけないと思う。日記は逐次自叙伝のように、語り手のことを全部、描写しようとしなから、語り手が実際にどういう人であったかを知る方法はない。先に述べたような、いやな女であったかも知れないが、日記は、そのテーマに従って語り手の一面だけを記述するから、日記の女は、普通の人間のように、複雑な、矛盾した性質を持っていて、時に心が暖い、親切的、思いやりのある、時には意地の悪い、恨みを抱く、自己中心の人であったという可能性もないわけではない。語り手は自分の悲しみ・絶望・不安というテーマを表現しようとして、自分の他の面を皆切り捨てて、テーマを強烈にして、それで真正性を醸した芸術的な重さを達成したと思う。子供の死のことを聞いて満足した記事は、確かに見にくくいやなのであるが、人間は実際そういうものであり、そんな反応に真実の響きがくっきり聞えるから、実は、その場面が叙述の真正性を保証する役に立つと思う。語り手は、こういう見にくくいやなことを記述することによって、自分の悲しみのどん底を明らかに表わすのである。

『かげろふ日記』が文学として成功した主な理由、その文学性の主な原因を幾つか述べて来たが、それはテーマの普遍性や重要性、日記の真正性、強い自我主張、テーマの統一、叙述の凝縮性などであった。原因は他にもあるのはいうまでもないことであるがたとえば話し手の主観的な感情・思考などの強調で達成された心理的な深遠性、和歌の上手な使い方など今述べた原因は、日記としての文学の立場からすると、殊に重要であると思う。『かげろふ日記』は平安時代日記文学の絶頂のようであるから、その文学性の原因はジャンルの典型的な文学的な性質を決めると言ってよい。こういう原因や性質が存在するときは、平安時代の日記が、文学として成功し、存在しないときは、失敗するといえるのではないかと思う。

注

- 1 Robert Fothergill, *Private Chronicles: A Study of English Diaries* (London: Oxford Univ. Press, 1974), p. 3.
- 2 ここまで述べた日記の定義は、ファザーギル氏に負うところが多い。ファザーギル、1～63ページは特に参考になっている。
- 3 John M. Elis, *The theory of Literary Criticism: A Logical Analysis* (Berkeley: University of California Press, 1974), pp. 42-53.
- 4 「日本古典文学全集」(小学館、昭和48年)、67～68ページ。
- 5 同、42ページ。
- 6 同、135ページ。
- 7 同、135～137ページ。